

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行



平成30年度秋季企画展『やおの弥生時代(前期～中期)―弥生文化の導入と集落の広がり―』から

1. はじめに

平成30年度の秋季企画展として、『やおの弥生時代(前期～中期)―弥生文化の導入と集落の広がり―』と題した企画展を行いました。展示では弥生時代前期前半の稲作文化の受容期から弥生文化が花開く中期後半までの時期を対象とし、八尾の人々が自然環境の変化のなかでどのような生活文化を営んでいたのかを調査成果をもとに紹介しました。

2. 河内平野周辺の地理的環境

弥生時代前期前半(紀元前4世紀)の河内平野の環境は、市内の北方に、淡水と海水が混じった汽水域の河内潟が存在し、弥生時代中期には河内湖に変化したものと推定されています。河内潟・河内湖を北に望む弥生時代前期～中期の八尾市域は、このような地理的条件を背景とした河内平野を中心に数多くのムラが成立しました(図2)。

3. 弥生時代前期から中期の市内のムラ

弥生時代前期前半に田井中遺跡・久宝寺遺跡・八尾南遺跡などでムラが成立しました。田井中遺跡では、縄文時代晩期末(長原式)の土器を使う集団の居住域に近接して、近畿地方最古の二重環濠を持つ環濠集落が形成されています(図3)。そのほか、久宝寺遺跡でも、縄文時代晩期末(長原式)のムラと前期前半のムラが約40m隔てた近い位置にありました。

中期(紀元前2～後1世紀)のムラは、前期のムラの周辺に作られています。ムラの存続時期は、短期で終わるものと同じ場所で長期間継続して営まれるムラがあります。長期間継続するムラは、亀井遺跡(図4)のように多重の濠で囲まれた環濠帯を持つ大規模な集落の形態を持つ集落で、中期前葉～後葉にかけて中河内地域を代表する中核的な拠点集落に発展しています。この他、山賀遺跡・田井中遺跡・水越遺跡・跡部遺跡・恩智遺跡なども環濠集落であったこと



図1 八尾市内の弥生時代の集落分布図



図2 河内湖の時代(約2,100年前)
(弥生時代中期) [(公財)大阪市博物館協会
大阪文化財研究所 2008『大阪遺跡』から一部加筆]

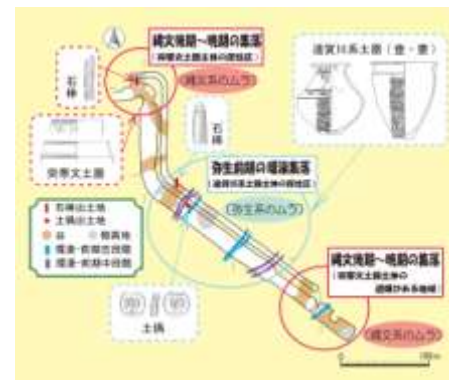


図3 田井中遺跡における縄文系と弥生系のムラの位置と主な遺物の出土地点

目次 ◆平成30年度秋季企画展『やおの弥生時代(前期～中期)―弥生文化の導入と集落の広がり―』から(p1～3)
◆平成30年度のイベントから(p3) ◆考古学よろずコラム第20回(p4) ◆イベント情報/編集後記(p4)

が確認されています。

生産域は、弥生時代前期前半以降、山賀遺跡・美園遺跡・池島・福万寺遺跡・志紀遺跡・田井中遺跡・久宝寺遺跡・八尾南遺跡などで水田が見つかりました。また、池島・福万寺遺跡や大竹西遺跡では、河川に設けられた灌漑用の堰が見つかり、自然河川や水路からの水量調整が、安定した水稲耕作を行ううえで大変重要であったことを示しています。

墓域は、弥生時代前期中頃に池島・福万寺遺跡や大竹西遺跡(写真1)で木棺墓・土器棺墓・土壇墓で構成され、前期後半には田井中遺跡で方形周溝墓が見つかりました。弥生時代中期(Ⅱ～Ⅳ様式)の墓域は、中期前葉(Ⅱ様式)の山賀遺跡・亀井遺跡・恩智遺跡、中期中葉(Ⅲ様式)の亀井遺跡、中期後葉(Ⅳ様式)の成法寺遺跡・田井中遺跡・久宝寺遺跡・神宮寺遺跡で方形周溝墓や土器棺が発見されました。



図4 亀井遺跡の弥生時代中期の環濠集落の推定範囲

4. 弥生時代の生活道具

土器(弥生土器)

生活道具のなかで土器は最も多く使用された道具です。その形状や用途から、貯蔵具の壺、煮炊具の甕、食事の際に用いた鉢・高杯などの土器があります。近畿地方では、弥生土器を5期(第Ⅰ様式～第Ⅴ様式)に区分し、第Ⅰ様式を前期、第Ⅱ～第Ⅳ様式を中期、第Ⅴ様式を後期としています。

河内平野では、前期前半(河内第Ⅰ様式)に北部九州の土器形式である遠賀川系土器と縄文時代晩期の突帯文土器(長原式)が共伴して出土しています。現時点で河内平野で見られる最も古い遠賀川系土器の出土例は、寝屋川市の讚良郡条里遺跡、東大阪市の若江北遺跡や市内南部の八尾南遺跡・田井中遺跡などが挙げられます。器種には壺・甕・鉢・高杯があります。

中期前葉(河内第Ⅱ様式)の土器は、回転台を利用した櫛状工具による櫛描文が確立し、器形の多様化が進み、広口壺、細頸壺、無頸壺、甕、鉢、高杯の器種があります。中期中葉(河内第Ⅲ様式)の土器は、多くの器種の成立と櫛描文による装飾を駆使した器種が多く見られます。そのほか、器壁の薄さや丁寧なヘラミガキを施す調整技法が認められます。中期後葉(河内第Ⅳ様式)の土器は、弥生中期のなかで最も土器の種類が多く、各器種の形に変化が認められる時期です。上記の器種に加え、水差形土器、把手付鉢、器台などの新しい器種が出現します。



写真1 弥生時代前期の墓域(北から)
(弥生時代前期中頃)《大竹西遺跡第1次》



写真2 市内出土の弥生時代前期の土器



写真3 市内出土の弥生時代中期の土器

石の道具

石製の工具では石斧・石錐・石小刀、農具では石包丁・石鎌・刃器、武器では石鏃・石剣・石槍があります。それぞれの用途や石材の違いにより、表面を打ち欠いた打製のものと磨きあげた磨製のものがあります。なお、後期には金属製品の普及に伴い、石器が減少する傾向がみられます。

木の道具

木製の道具には、農具(鋤・鍬・エブリ・田下駄・田舟・穂摘具・斧の柄・竪杵・臼・木錘)、運搬具(檣)、漁撈具(櫂・網杵・やす)、武器(弓・矢・盾)、紡織具(経巻具)、容器(高杯・鉢・盤・合子)、食事具(杓子・匙)、服飾具(櫛)、祭祀具(剣形・戈形・鳥形・木偶)などの豊富な種類が見られます。



写真4
市内出土の弥生時代
前～中期の石の道具



写真5
恩智遺跡出土の木製品
(農具・祭祀具)

5. 弥生時代のマツリといのりの道具

稲作文化が各地に定着した中期前葉以降、銅鐸・剣・矛・戈の青銅器が、農耕祭祀を中心とした弥生時代を代表する祭祀器になりました。

市内では銅鐸が跡部遺跡から1例(跡部銅鐸(写真6・7))、恩智遺跡で2例(垣内山銅鐸、都塚山銅鐸)、亀井遺跡から扁平鈕式と突線鈕式(Ⅳ-4・5式)の銅鐸片がそれぞれ1例見つかっています。

この内跡部銅鐸は、扁平鈕式古段階の一区流水紋銅鐸で、高さ46.6cm、裾幅30.4cm、重さ4.7kgを測ります。石の鋳型で鑄造されたと考えられており、作られた時期は弥生時代中期後葉で、埋納された時期は出土した土器から中期後葉から後期前半が考えられます。ほぼ同規模で、身に同様の流水紋を施す類例には、和歌山県和歌山市出土の有本銅鐸が挙げられます。両銅鐸は流水紋の他、全体の文様構成の諸特徴がよく似ており、同範銅鐸ではないものの、同じ工人が作った銅鐸である可能性が考えられます。

また、木製品・土製品・骨角器は、恩智遺跡から銅戈形木製品、亀井遺跡から冠状木製品、銅鐸型土製品、分銅形土製品、占いに使われた卜骨、亀井北遺跡から鳥形木製品が出土しています。



写真6 跡部銅鐸出土状況(北東から)



写真7 跡部銅鐸

平成30年度のイベントから

●秋季企画展関連講演会の開催

2018年10月28日(日)には『弥生時代の金属器—八尾市域出土の銅鐸について—』、2019年1月20日(日)には『弥生時代前期～中期の河内の集落について—』と題する関連講演会を開催しました。

八尾市内の遺跡から出土する銅鐸や土器を中心に、弥生時代の集落の役割について考えてみました。



●大人のための考古学入門講座

2019年2月9・16・23日(土)の3週にわたり大人を対象とした考古学入門講座を開催しました。3日間にわたり、発掘調査の方法、地層の見方、土器の観察や編年表の見方、実際の土器を用いた実測、石器の使いかたの説明などの講義を実施しました。

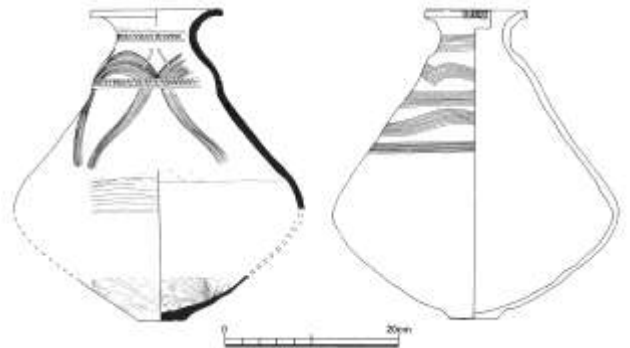


ふるい ししがけ しもながやま
古井式(獅子懸式・下長山式)土器と恩智遺跡

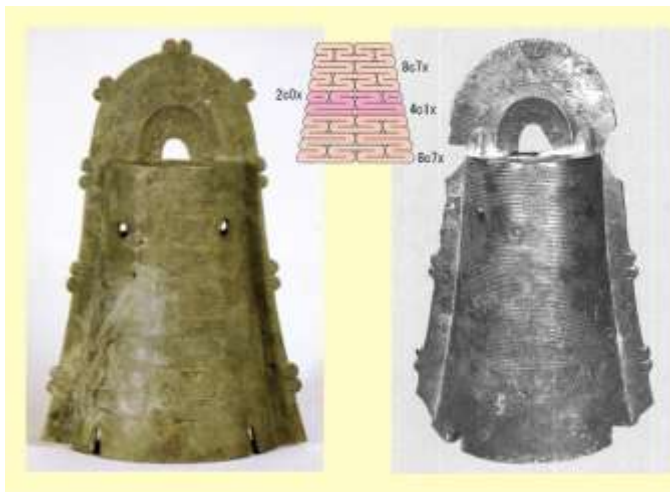
古井式(獅子懸式・下長山式)土器は、愛知県中東部の三河地域で作られた弥生時代中期後葉の土器で、愛知県全域、岐阜県南部、三重県北中部に分布しています。この土器が府下では唯一恩智遺跡から出土しており、同時期の両地域間の関係を考えるうえで貴重な資料を提供しています。

これらの土器の製作地域にある愛知県豊川市御津町広石からは、本市春日町で発見された跡部銅鐸と同じ文様構成を持つ広石銅鐸(扁平鈕式古段階横型流水文〔有本型B類〕)が見つかっています。この銅鐸は、弥生時代中期後葉に大阪府南部(河内?)で作られた可能性が高いと考えられており、河内から三河へ運ばれたものと考えられます。

これらから、恩智遺跡は、同時期において、広範にわたる物流や交流を考えるうえで、重要な役割を果たした拠点集落の一つであったと言えるかもしれません。



1980『恩智遺跡Ⅰ』より 2004『安城市史』より
古井式(獅子懸式・下長山式)土器・壺
左：恩智遺跡出土 右：愛知県西尾市岡島遺跡出土



跡部銅鐸【八尾市指定文化財】 広石銅鐸(豊川市御津町広石出土) 【愛知県指定文化財】



古井式(獅子懸式・下長山式)土器が出土する主な遺跡の分布図
2004『安城市史』に加筆

扁平鈕式古段階横型流水文(有本型B類)
横型流水文模式図は『2011 弥生文化博物館図録』より
写真は(財)八尾市文化財調査研究会 報告 31 より

編集後記

『平成』と言う一つの時代が終わろうとし、新しい時代への転換期に差し掛かってきました。

平成で何が変わったか？アナログからデジタルへ技術が飛躍的に進歩しました。インターネットの普及で、世界中の情報を知ることが可能になり、便利な世の中になりました。技術の発達には目覚ましいものがあり、日常生活には欠かせない存在となっています。

しかし、ネット上には間違った情報も含まれているということを肝に銘じて、情報の使い方には注意を払いたいですね。

(KN)



イベント情報

◆通常展「八尾の地宝—埋蔵文化財調査センター収蔵品—」

内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の遺物を中心に展示

期間：平成 31 年 2 月 20 日(水)～6 月 7 日(金)

時間：午前 9 時～午後 5 時(入館は午後 4 時半まで)

休館日：土、日、祝日

◆講演会等「やお・埋蔵文化財トークーあの遺跡・遺物は今—」

演題：「土器の移動からみた弥生時代後期の地域間交流」

講師：西村公助 (当施設学芸担当)

日時：平成 31 年 5 月 26 日(日)午後 1 時 30 分～(先着 30 名、資料代 200 円)



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌

『八尾・よろず考古通信 20号』

発行：2019年3月31日 八尾市立埋蔵文化財調査センター

(編集：公益財団法人八尾市文化財調査研究会)

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目 58-2

TEL・FAX 072-994-4700

E-mail：maibun_zyao@cmail.plala.or.jp

